公開講演会記録

『満洲国グランドホテル』を書き上げて

雑文家　平山周吉

昨年（２０２２年）『満洲国グランドホテル』（芸術新聞社）という本を出しました。おかげさまで司馬遼太郎賞を頂戴するという幸運に恵まれた本です。本来でしたら、執筆を開始する前に、こちらの国際善隣協会にある本や資料を拝見させてもらっていたら、相当、効率よくできたんじゃないかなと、残念に思っています。

『満洲国グランドホテル』は全部で三十六回ありまして、一応、各回ごとに主人公を立て、三十六人の満洲国に関わりのあった人を一回ごとの主人公にして、それぞれの見た満洲国を調べ、三十六人の人生を重ね合わせて総合していくと、今まで語られてきた満洲とは違う満洲が見えてくるのではと思って始めました。満洲というと、どうしても満洲事変から建国までの時期か、敗戦と崩壊の時期かが歴史として語られてしまいますから。

表紙カバーは、安彦良和さんに描いてもらいました。安彦さんは満洲を舞台にした漫画『虹色のトロツキー』の作者であることは言うまでもありません。表紙カバーの真ん中には満洲国の国旗と日本の日の丸がなびき、その周りに九人の人が描かれています。普通に考えると、この九人みんなが、その三十六人の中に全部入っているだろうと思われるでしょうが、実は三十六人に選ばれていない人も安彦さんにお願いして、描いてもらいました。ぜひこの人の顔は入れたいんで描いてくださいと頼み、入れてもらいました。羊頭狗肉もいいところですが。

上から時計回りで、李香蘭（山口淑子）、石原莞爾、原節子、古海忠之、河本大作、松岡洋右、岸信介、甘粕正彦、小林秀雄、となっています。『満洲国グランドホテル』で主人公となっているのは、このうちでは四人しかい

ません。李香蘭、石原、河本、岸、甘粕の五人は脇役としては登場しても、主役は張っていません。満洲の歴史では「二キ三スケ」（東条英機、星野直樹、松岡洋右、岸信介、鮎川義介）が有名ですが、その中では星野と松岡は三十六人の中に入れました。三十六人には入らず、表紙の九人に入っている中では、甘粕正彦と河本大作がいます。本の中では勝手に「一ヒコ一サク」と名づけてしまいました。この二人は考えようによっては、「二キ三スケ」よりも重要な人物といえるでしょう。三十六人にこそ入っていませんが、『満洲国グランドホテル』では、あちこちに登場しています。

肝心の三十六人を、一応、職業別に分類してみました。そうすると、今までの満洲についての本とはかなり違っていることが一目瞭然になってきます。一番多かったのが、満洲国の官僚だった人で八人と、相当多い。その次には、新聞記者その他のジャーナリストで六人。次は、陸軍の軍人で五人ですね。それから、満鉄という分類で同じく五人。作家・評論家が四人、映画関係者が四人。残りは、少年二人、学者一人、主婦一人という分類になりました。

自分なりには、満洲国を語る上で重要なのは官僚なんじゃないかなと思っています。陸軍の軍人も、実情は陸軍の官僚なわけですから、それも入れちゃいますと、官僚は合わせて十三人になっちゃうんですよね。政治家がいない国家で、関東軍と官僚がやってた国家なんで、当然と言えば当然なんですけど。官僚は普通の読者には馴染みが薄い人が多いのですが、あえてクローズアップしています。

ジャーナリストが六人もいるのは、これは、僕がもともとジャーナリストの書いたもの、あるいは回想したものを愛読しているせいもあります。同時代を記録するという意識が職業的習性としてあるので、いろんな記録をし、記憶をしている。あの当時は書けなかった裏話をたくさん持っているというので、ジャーナリストを入り口にしていくと、満洲国の実情に近づきやすいなということがあったので、意図的にジャーナリストを多く取り上げようとは、当初から思っていました。

ここに今年の三月に出た『未墾地に入植した満蒙開拓団長の記録』（文学通信）という本を持ってきました。サブタイトルが「堀忠雄『五福堂開拓団十年記』を読む」とあります。新潟県の開拓団で、五福堂開拓団というのがあって、団長だった山形県出身の堀忠雄という人が残した記録を、研究者が読み解いたものです。開拓団の人たちは敗戦後に悲惨な目に合うわけですけど、この五福堂開拓団は例外的に敗戦時の混乱の中でも悲惨な目に合わずに済んだという、幸運に恵まれた開拓団です。なぜそういう幸運に恵まれたかということも含めて書いてある。

この五福堂開拓団は昭和十五（一九四〇）年の日活映画『沃土萬里』（倉田文人監督、江川宇礼雄、風見章子主演）のロケ地になったとこの本に書かれていたのにはビックリしました。この『沃土萬里』を僕はたまたま見ています。昭和五十二（一九七七）年の秋

に京橋のフィルムセンター（現、国立映画アーカイブ）で上映されました。映画に撮られた満洲の風景がすごく強烈な印象に残っていて、この映画をもう一度見たいとずっと思ってきたんですが、見る機会がないままに四十数年経っちゃった。昭和五十二年に、僕が満洲にある程度興味を持ったのは、この映画を見たのがひとつと、この年には、今は亡き旺文社文庫で、地味なユーモア作家・木山捷平の『大陸の細道』（現在は小学館P＋D BOOKS）が出ました。『大陸の細道』は昭和十九（一九四四）年に内地で食い詰めて満洲に流れていき、敗戦前に召集されて苦労する話を小説仕立てにした、私小説なんです。『沃土萬里』という映画と、『大陸の細道』という小説、この二つとの出会いが、何十年もたってから『満洲国グランドホテル』を書くことにつながっていたんだと、最近気づきました。

昭和五十二年に、僕は文藝春秋というところに勤めていて、当時は『週刊文春』編集部の下っ端の記者でした。仕事が嫌だったもんで、小説や映画のほうに惹かれていました。この年の月刊『文藝春秋』に載った記事も私の満洲への関心を掻き立てるのに役割を果たしてくれたと思います。七月号に載った「危機の宰相」というノンフィクションと、十一月号に載った「満洲の妖怪」というタイトルの岸信介研究レポートでした。

「危機の宰相」は沢木耕太郎さんが二十九歳の時の作品です。本になるのはずっと後ですし（現在は文春文庫）、沢木さんのさわやかなイメージともかけ離れたもので、池田勇人と彼を支えた「敗者」たちの話です。池田首相の大蔵省時代の友人だった田村敏雄という人物がいます。田村は大蔵省から満洲へと派遣された役人の一人で、シベリア抑留から帰国後、池田の政治団体「宏池会」の事務局長になりました。この人のことがずっと気になっていたので、『満洲国グランドホテル』では第十二回の主人公として取り上げました。

「満洲の妖怪」はタイトルがショッキングですが、商工省の役人から満洲に出向した岸信介の満洲時代を調べ上げた調査報道の大型ノンフィクションでした。ここには、満洲国官僚が作った満洲国のシステムというのを岸信介が戦後に持ち込んだということを相当具体的に書かれています。当時は戦後三十年がたっていましたが、満洲についての証言者は健在でしたので、チーム取材によって、たくさんの新しい話を紹介していました。この二つのノンフィクションとの出会いも昭和五十二年でした。

『満洲国グランドホテル』は出版された後に、ずいぶん取材を受けました。取材の方々が読んでいて印象に強く残った人としてよく挙げた名前が二つあります。小坂正則（第四回の主人公）と内村剛介（第三十三回の主人公）です。小坂は回想録『もう一つの昭和史・男たちの靴音――私の異色人脈簿』（尚友倶楽部）を書いた元新聞記者、内村はハルビン学院を卒業した後、関東軍で通訳をやっていて、戦後十一年間シベリアに抑留され、『生き

急ぐ――スターリン獄の日本人』を書きました。

小坂正則という人は、歴史的には名前を残してない人です。「満洲の廊下トンビ」を自称していて、岡山の旧制中学校を出た後に、満洲に流れていって、新聞記者をやりながら、警察の仕事もするという、ちょっと、いかがわしい存在なところからスタートして、だんだん新聞記者として頭角をあらわし、満洲国の著名人に食い込む。星野直樹のような官僚にも食い込むし、張作霖爆殺の張本人である河本大作のような、満洲の中で隠然とした実力者で、満鉄の理事をやったり、経営者にもなっている、そういう人にもどんどん食い込んで情報を取ってきた。そうした秘話をたくさん書いているんですね。多分この本が満洲の歴史の記述に使われたことはあまりないと思う。内容というと、ヤバいっていうのは、お金のことであるとか、満洲の夜の世界で、男たちがどんな遊び方をしていたかとか、裏にはどんな人脈があったとか。機密費がどうなっていたかでは、自分が誰それから、これだけの機密費をもらっていたということまで、アケスケに書いています。あるいは、機密費じゃなくて嘱託みたいな形で自分がいろんな人からお金をもらったとか、そういう普通だと表に残さないような話も書いてるんですね。そういう意味で言うと、非常に貴重なものなんです。僕は、この本を読んで、『満洲国グランドホテル』が書けるかなと思ったくらいです。で、ただ心配なのは、どこまで信じていいのか。この本は、一般社団法人尚友倶楽部常務理事である阪谷芳直さんのようなきちっとした人が本にして残そうとしたのだから、間違いはないでしょうが、やはり、どこまで信じていいか心配でした。

考えてみると、『文藝春秋』に載った「満洲の妖怪」に、小坂正則は証言者として出ていたんですね。で、その取材グループの一人に、塩田潮さんという政治ジャーナリストがいました。塩田さんとは知り合いだったので、ひょっとして塩田さんが小坂正則に会って取材したのではないかなと、ふと思い、塩田さんに電話をしてみました。そうしたら、何度も会って話を聞いたと言うんですよね。当時の取材原稿がまだ家の中にあるはずだから、ちょっと探してみますよと言ってくださった。そうしたら塩田さんの家から当時の取材原稿が、ごそっと出てきたのですよ。二百字詰め原稿用紙で四百枚ぐらいある。普通の単行本一冊分ぐらい。その取材原稿をポンと渡された。これには感激しました。この本でも引用をしていますが、塩田さんは二十人くらいの満洲国関係者から話を聞いていました。読んでいますと、もう、四十数年前の取材ですが、一問一答の形で書いてあるので、皆さん、生けるが如くに喋ってる。生けるが如く――当時生きてらしたのだから当たり前なんですけど、生けるが如くに再現されていて。こんなに四十数年前の取材原稿がきちんと残されているのかと感心したんです。中でも、小坂正則は何でも取材に応じていて、何度も話をしていることも知りました。当時の

取材原稿を見て、この人の証言がある程度、信頼していいと、大丈夫だと思ったので、本の中では相当思い切って小坂正則の本からエピソードを拾っています。ですから、本を書く上では、アンチョコにしたというか、持参した小坂正則の本には、ご覧のように付箋がいっぱい引用しちゃったということなんですよね。

小坂正則はむしろ例外的な人物です。小坂は戦後には「大蔵省の廊下トンビ」になったそうです。大蔵省というと、『満洲国グランドホテル』では四人を取り上げました。「平和の義勇軍」と新聞には囃し立てられて、日本を出発した。高級官僚で向こうに行った人は、やはりいわゆる官僚には収まりきれないタイプが多かったのではないかと思いました。大蔵省出身の人たちを見てると、大蔵省の中で誰を満洲に送り込むかっていうときに、あ、こいつだったら満洲行けって言うと、なんか行っちゃいそうだなっていう人が選ばれるんですね。それは本を書いてよくわかりますよ。なんかやっぱり満洲に行く人というか――行かされたって言っても微妙なんですけど――その人たちには、ある気質みたいなのがあるのではないか。日本の役所の前例踏襲の世界と必ずしもマッチしない。大蔵省に入省はしたけれど、ちょっと肌合いが違うかなみたいな人が、満洲国に勧誘されるわけです。

僕は大蔵省の中では古海忠之という人のファンになりました。古海は戦後十八年間も抑留される。で、この人は、大蔵省から派遣されて、最終的には、官僚としてはナンバーツーですから、責任をずっと負わされて仕事をしてきた。懲役十八年の刑で、昭和三十八（一九六三）年まで中国の監獄にいた。この人は、学生時代は野球の名選手でした。旧制三高と東京帝大の野球部の選手なんですね。満洲に行っても野球をやってて、役人をやりながら野球のチームを監督として率いていた。勤務時間中に野球場にいるのが許されていた。そんないい加減なことは多分満洲だから許容されたのでしょう。いくらなんでも東京の役所にいたら許されないと思う。そういう人なんですけど、この人が一番おかしいのは、大蔵省に入省は決まったが、高等文官の試験にまだ受かってなくて、受験勉強を急いでやろうっていうんで、日光の宿屋で勉強します。その時にすごい酔っ払い客と意気投合して、仲良くなっちゃうんです。めんどうくさい酔っ払いと意気投合して、毎晩、お酒を酌み交わす。昼間は勉強してると思うんですけど、夜になると、酒を酌み交わす。タチの悪い酔っ払いなんです。普通、こんな酔っ払いと受験生は付き合わないと思うんですけど、付き合っちゃうんですよね。で、この付き合っていた酔っ払いは誰かっていうと、これが葛西善蔵という、私小説作家です。文壇でも有名な酔っ払いで、貧乏ときている。そんな文士と、大蔵省に入ろうという帝大生が親しむなんて、普通あり得ないです。やっぱそういう感覚の人が大蔵省の中でも満洲に行くんだなと。

日光でその時、一緒に勉強してた、

もう一人の人間が、やはり同級生で、難波経一という人で、『満洲国グランドホテル』では第十五回の主人公です。難波経一はラグビーの選手として有名な人、やたら体のでかい人で、この人は何で大蔵省からスカウトされたかというと、満洲国では阿片を取り扱わなくちゃいけない。国の予算の中に、阿片の専売っていう仕事があり、この危険な仕事を任せられる大蔵省の人間、誰かいないかっていうんで、じゃあ、こいつしかいないだろうというふうに、衆目の一致するところとなって選ばれるのが、難波経一という人なんですね。難波経一は、どうも相当やり手というか、満洲国でやりすぎちゃったんで、早めに満洲でも民間に出される。その代わりに早めに民間に行ってたんで、昭和十八（一九四三）年に、今度は日本の商工省に引っ張られて、商工省で役人に舞い戻ったりするんです。どっちにしても、相当型破りな人たちが行ってるんですよね。で、そういう人たちが、満洲の国の風土っていうのを作っているんですね。

内務省の出身者ですと、武部六蔵と大達茂雄の二人を取り上げました。武部六蔵という人は、昭和十五（一九四〇）年、陸軍大将の梅津美治郎が関東軍司令官になった時に、引っ張られて、満洲国の総務長官となり、終戦までずっといて、その後苦労するんですけど。この人は非常に普通の役人なんですよね。日記が残ってまして、『武部六蔵日記』（芙蓉書房出版）という本になっています。日記といっても、総務長官時代の数年間の日記ではなく、その前に満洲に勤務していた時代の日記ではありますが。総務長官時代の日記はあの混乱の中でなくなっちゃったんでしょう。出てくると面白いなと思うんですが、中国のどこかの檔案館みたいなところに眠ってんじゃないでしょうか。もし発見されたら、ぜひとも読みたい日記です。

本になった時代の日記は、日本大学の古川隆久先生が武部の息子さんたちと一緒に翻刻しています。武部は存在としては地味なんだけれども、モノや人間をよく見ている人で、内務省で順調に出世していくタイプなのでしょう。性格はおとなしめで、顔も目立たない。存在感の薄い感じなんですよね。当時の満洲国の雑誌を見ても、こんどの武部新長官は前任者の星野直樹長官に比べると物足りないなみたいな感じの下馬評で書かれています。その通りの人なんですけれど、でもなかなか、やはり見るところは見ている人。

この人は家族を大事にする人で、奥さんと子どもたちを、新京の新居に呼び寄せて暮らしてます。岸信介ですと単身赴任で、満洲では夜の街でなかなか豪快にやってる感じでした。武部六蔵はそうではなくて、満洲に家族を呼び寄せる。ところが満洲では、毎日毎日宴会があるんですね。日記を見ると、もう疲れ切っちゃっている、毎晩仕事として飲まなくちゃいけない。満洲国政府だけでなく、交渉相手の関東軍とか関東局とか、いろいろあるわけですよね。お互いが横の連絡を取り合いながら酒を飲んで、そこで決めたりとかするんで、そういう宴会にずっと出たりして、嫌だなっていう感じを、

珍しく日記に書いています。

僕は武部六蔵について、いろいろ調べてみて、一番調べてよかったなと思ったのは東京裁判のことでした。この人は、ソ連に抑留されてる時に、証人としてソ連から呼ばれる。陸軍の瀬島龍三もその時に呼ばれるんですけど。武部は官僚のトップなので東京裁判に呼び出される。その時にはもう、体調すごく悪いんです。東京裁判に呼ばれて一時帰国でき、家族にも再会できたりするんですけども。

その東京裁判の速記録で、武部六蔵がどんな証言したのかと調べてみました。速記録は小さな文字で四段組で組まれている。淡々と答えているだけですが、重要な部分は『満洲国グランドホテル』に引用しました。ベン・ブレークニーというアメリカ人の弁護士、梅津被告の弁護人ですね。武部は梅津関東軍司令官のもとで、トップの官僚でした。以下は、市ヶ谷の法廷での証言です。

ブレークニー「あなたが、満洲へ行った理由というのは、満洲国を健全なる国家に、つくり上げる目的のためであるということを言っておりました。この満洲国を健全な国家につくり上げるというには、その国の民衆の生活状態の安定、または向上が必要であったのではありませんか」

ブレークニー弁護人はなかなかうまい質問をするなと思います。それに対して武部は「（民衆の生活状態の安定、向上は）必要であります。私は満洲国の状態は、逐年向上しておった、こういうふうに思います」と答える。自分の満洲国総務長官在職中に、教育の普及であるとか、衛生状態であるとか、農民の生活であるとか、医療であるとかが「相当よくなったことを認めますが、私が自分で誇るつもりは何もございません」。これが武部の市ヶ谷での言葉でした。武部六蔵は、そういう最小限の自負を、東京裁判という公の場で言い残せたのは、この人にとってはよかったんではないかというふうに僕は思いました。その発言を『満洲国グランドホテル』の中で引用できたのは、意味があることだったんじゃないかなとも思っています。関東軍と大喧嘩をして満洲国を去った大達茂雄にも触れたいのですが、こちらは省略します。大達も僕の大好きな登場人物です。

軍人ですと、植田謙吉という人に注目しました。植田関東軍司令官はノモンハン事件の責任者で、責任を取らされた将軍です。週刊誌的な話題で言うと、当時「童貞将軍」と言われていて、一生、結婚しなかったんですね。軍人として後顧の憂いがあっちゃいけないと家族を持たなかった。昭和七（一九三二）年の第一次上海事変の時に、この人は軍人として有名になった。ノモンハンでは敗軍の将ですけれど。その敗軍の将として帰ってきた時に、宮中から車が出るのですけれども、植田大将は車を断っています。陛下が出して下さった車を断るとは、よほどのことです。そのエピソードを僕は、当時の陸軍次官の山脇正隆が『秘録　板垣征四郎』の中で書いているのを読んで、そこから植田謙吉という陸軍大将に興味を持って、調べ始めた。そうすると、この人は、キャラクターとして非常に

面白い。一方では辻政信のような非常に問題ある人物を重用してもいる。で、そういう問題も後になって、前田啓介さんという読売新聞の記者が書いた『辻政信の真実』（小学館新書）を読んでわかったのですけど、辻政信は戦後も植田謙吉と親しくしていて、辻の息子の結婚式の主賓として植田謙吉を呼んだりと、関係がずっと続いてたりするんですよね。『満洲国グランドホテル』では、「「忠臣」植田謙吉はソ連飛行基地空襲を除いては、大命に従っていたのではないか」と、通説とは違う意見を書きました。

内村剛介にだけ触れて、おしまいにします。読んでくれた方の何人もが、内村剛介の発言に注目してくださいました。内村剛介という人は、戦後の歴史観で満洲国を見てしまうのは必ずしも正しい見方ではないんじゃないかっていうことを、相当戦闘的に、挑発的に言っているんですよね。それは月刊『文藝春秋』の激突座談会という場で、昭和五十八（一九八三）年九月号の座談会「日本人にとって「満洲」とは何か」での発言です。座談会に出席した石堂清倫、澤地久枝とかを相手に戦闘的に言ってる。これはある意味で大きな問題提起で、僕はこの問題提起はある程度受け止めなくちゃいけないかなと思ったので、本の中では意識的に大きく取り上げています。

内村は別に戦後の日本がいいとは全く思ってない人ですし、戦争中の日本もいいとは思ってない人ですけれども、今まで見られてきていた満洲国の歴史であったり、あるいは日本の近代史というものを、どういうふうに見直すべきか、示唆に富む刺激的な発言を重ねています。「日本人がすべて悪いという満洲史観には同意できません。きのうは勝者満鉄・関東軍に寄食し、きょうは勝者連合軍にとりついて敗者の日本をたたくというお利口さんぶりを私は見飽きました。そして心からそれを軽蔑する。われわれの先輩、たとえば初代満鉄総裁の後藤新平の企図は公平に評価されるべきだと思う。文治主義的で平和にやっていけば、満洲での五十万ないし六十万の日本人の移民が可能だというのが彼の考えだった」というのが内村の意見です。内村はさらに続けて言いました。「満洲が他国かどうか、ぼくには疑問がある。あれ（満洲）はノーマンズ・ランド（無主の地）だったということも明らかです」。

まだ紹介したい人はたくさんいるのですが、今日はここまでとします。

（２０２３年７月18日・公開講演会）

筆者略歴（ひらやま・しゅうきち）

１９５２年東京都生まれ。雑文家。慶應義塾大学文学部国文科卒業。著書に『昭和天皇「よもの海」の謎』（新潮選書）、『戦争画リターンズ――藤田嗣治とアッツ島の花々』（芸術新聞社、雑学大賞出版社賞）、『江藤淳は甦える』（新潮社、小林秀雄賞）、『満洲国グランドホテル』（芸術新聞社、司馬遼太郎賞）、『小津安二郎』（新潮社）がある。近著に昭和史の読書ガイド『昭和史百冊』（草思社）がある。